

京都ファインアーツ・プラス 第 10 回演奏会

Kyoto Fine Arts Brass
10th Concert

2001.3.4 (日) 午後 1 時 30 分開場 午後 2 時開演
京都府立府民ホール "アルティ"

主催：京都ファインアーツ・プラス 後援： -STATION FM KYOTO



ごあいさつ

本日は、私たち、京都ファインアーツ・ブラスの演奏会によくお越しくださいました。

節目となる第10回目の演奏会を迎え、今回は、1部に20世紀の作品を、2部には主にヨーロッパの国々の民族色の強い作品を中心にプログラムを構成いたしました。いずれも作曲者の個性溢れる音楽ですので、お時間の許す限りお楽しみください。

さて、私たちは、団体の結成時よりずっと、「アンサンブル」という合奏スタイルをとっています。つまり、同じ譜面を複数の奏者で演奏せず、指揮も行いません。こうしたスタイルでは、個々の奏者はお互いの演奏を注意深く聴きあい、また、時に強い主張をもって表現することで合奏が成り立ちます。こうした演奏中の「やりとり」を通じて、演奏に一体感が生まれ、作り出されるハーモニーに生命力が加わるのを感じることは、私たち奏者にとって大きな喜びを感じる至福の瞬間です。こうしたアンサンブルの醍醐味は、一度味わった者たちをつかんで離しません。本日の演奏会では、アンサンブルを通じて音楽を表現できる私たちの喜びをお伝えできること、また、皆様にもそれを楽しみ感じ取っていただくことができれば、何より嬉しく思います。

私たちは今まで、自主演奏会や合同演奏会を通じて、100曲以上の曲を演奏してきましたが、このように多くの曲を経験したことは、私たちの財産であり、それぞれのメンバーにとっては思い出の深い曲ばかりです。しかし、ブラスアンサンブルのレパートリーには、これまでに取り上げるのでできなかった名曲がまだ数多くあります。また、皆様の耳になじんだ曲も、ブラスアンサンブルで演奏すれば、その曲の新たな魅力に出会えるかもしれません。

今後、第15回・第20回と演奏会を行っていくなかで、私たちは、様々な曲を取り上げることを通じて、ブラスアンサンブルの新たな可能性や魅力を追い続けたいと、想いを新たにしております。それに加え、まだ発展途上の団体でありますので、よりすばらしい音楽をお届けできますよう、演奏面・音楽面など、成長してまいりたいと思っております。

今後とも、京都ファインアーツ・ブラスの活動を見守り、応援いただけますよう、お願い申し上げます。

京都ファインアーツ・ブラス

Program

R . シュトラウス
ウィーン市の祝典音楽からのファンファーレ

E . グリーゲ
作品集

C . ドビュッシー
シャルル・ドルレアンの3つの歌

B . ビーチ
金管 5 重奏のための音楽

B . オール
金管10重奏のためのトーナメント

Pause

伝承曲
ジェリコの戦い

J . クツィール
金管 4 重奏のための小組曲

J . ブラームス
ハンガリー舞曲第 5 番

A . ドヴォルジャーク
スラヴ舞曲集 作品46より第 8 曲

G . ビゼー
カルメン

演奏曲解説

R. シュトラウス：ウィーン市の祝典音楽からのファンファーレ

R. Strauss : Festmusik der Stadt Wien

リヒャルト・シュトラウスは、19世紀から20世紀にかけてのドイツ最大の作曲家で、代表作には、「2001年宇宙の旅」で有名な交響詩「ツァラトゥストラはかく語りき」や、「ドン・ファン」「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快なはずら」「英雄の生涯」等の交響詩、アルプス交響曲等があげられる。父はフランツと言ってホルンの名手であったことから、幼い頃からホルンの音色には慣れ親しんでいたのか、どの作品も非常にホルンの扱い方が効果的かつ魅力的である。また、2曲のホルン協奏曲を残しており、これらは大変優れた作品であり世界中のホルン奏者達の重要なレパートリーとなっている。(筆者はホルン吹きである)

今回KFABでは、シュトラウスの作品で兼ねてからの希望であった、「ウィーン市の祝典音楽」『Festmusik der Stadt Wien für Blechblasinstrumente und Pauken o.op.AV133』(1943-1-14)より、ファンファーレを取り上げることにした。この作品は、ちょうどシュトラウスが妻と一緒にウィーンで過ごした1943年1月14日に、ウィーン市金管合奏団により委嘱され完成した。この金管合奏団は、1926年に結成された大変名高い合奏団で、ウィーンフィル、ウィーン交響楽団、ウィーンフォルクスオーパー管弦楽団のメンバーで編成されていた。「ウィーン市の祝典音楽」は、第1部隊にトランペット5、トロンボーン3、テューバ1、第2部隊にトランペット5、トロンボーン4、テューバ1、そしてティンパニ(オリジナルにはホルンは含まれない)という編成で、演奏時間が12分にもなる大曲であるが、PJBE(フィリップジョーンズ・ブラスアンサンブル)により、G・エマーソンの編曲で、ちょうど2分程度の演奏時間に短縮した演奏が録音されている。この演奏は、演奏時間の長い「ウィーン市の祝典音楽」を単にカット編集してファンファーレにしたものと思っていたが、私たちは、これとそっくりなオリジナル版がある、というところにたどり着いた。それは、「ウィーンファンファーレ」『Wiener Fanfare (Fanfare der Stadt Wien) für Blechblasinstrumente und Pauken o.op.AV134』(1943-4-17)というもので、1943年4月に3番目のファンファーレとして書かれている。これは、同じ月に初演された「ウィーン市の祝典音楽AV133」のテーマを基にしているものであり、曲の最初と最後をつなぎ合わせたものである。とにかく長編のオリジナル版は改訂して短くするように要求されていたらしく、おそらく、これが祝典音楽に代わろうとするものであっただろう。「ウィーンファンファーレ」は、シュトラウス自身の版ではなく、ウィーン金管合奏団のために編曲されたものが、最初に演奏されたと思われる。事実、手稿のスコアどおりに演奏される原典版は最近まで有効ではなかったし、1989年6月11日にガルミッシュでミュンヘンフィルとバイエルン放送響のメンバーによって演奏されたのが、「ウィーンファンファーレ」の原典版の世界初演であったと見なされている。PJBEの為に編曲されたファンファーレは原典版そっくりであるが、複数のホルンを使って響きに幅を持たせた、シュトラウスらしい編曲に仕上がっている。また、PJBEの録音が1972年であることから、編曲したエマーソンはこの「ウィーンファンファーレ」の存在を知っていたか、耳にしたことがあったのではないかと推測する。

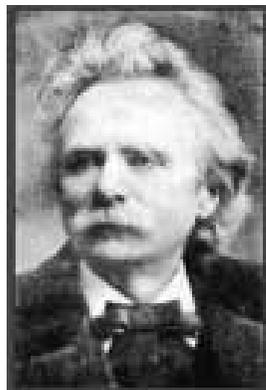
KFABが本日演奏するファンファーレは、原典版でもないPJBE版でもない、スペシャルアレンジを取り上げることにした。2本のホルンを加え、叙情的な旋律の中間部も、原典版とはちがう箇所を起用し、ホルンの音色を生かした素晴らしいアレンジとなっている。

私たちKFABにとって記念すべき10回目の演奏会、そして21世紀最初の演奏を飾るこのファンファーレに、いつまでもファインアーツであり続けたいという思いを込めたい。



E. グリーグ：作品集

E. Grieg : Pieces



北欧の国ノルウェーを代表する作曲家であるエドヴァル・グリーグ(Edvard Grieg 1843-1907)は、ピアニストとしても活躍し、多くのピアノ曲を残しています。本日は、彼のピアノ曲集から4曲を抜粋して演奏致します。

ノルウェー第2の都市、スカンジナビア半島の西端に近い商港ベルゲンで、グリーグは生まれました。ライプツィヒ音楽院を卒業後に、幼なじみの従妹ニーナと結婚し、コペンハーゲンやオスロを拠点に作曲活動を行う中で、「ピアノ協奏曲イ短調」(1869年)の成功によって作曲家として広く認知されました。その後、活動の拠点を移しながら、劇音楽に注力した期間を経て、生地のベルゲンから程近い丘陵の町、トロールハウゲンに居を定め(トロールハウゲンは、「妖精の丘」という意味)、以降、亡くなる直前まで、創作活動や欧州諸

国への演奏旅行に精力的な活動を行いました。彼が生前に住んだ家は、現在では博物館として公開され、国内外から多くの観光客を迎えています。

グリーグの作品が、ノルウェーの神秘的な自然から影響を強く受けたことを示す逸話は多く残っています。彼はフィヨルドの海岸近くに小屋を持ち、自然に囲まれた環境で作曲に没頭していました。こうした超然とした創作活動の一方で、グリーグは社交的な一面を持っていました。同郷の作曲家ノールローク（Rikard Nordraak）とのノルウェー民族音楽への共鳴、文豪イブセンとの共同作業による「ペールギュント」の劇音楽の作曲、チャイコフスキーやブラームスを初めとする作曲家達との親交の広さから伺うことのできる社交性は、肖像画の醸す神経質な印象とはずいぶん違うものです。

なお、編曲者であるアラン・シビル（Alan Civil）は、英国のホルン奏者であり、伝説的な名奏者のデニス・ブレインの同僚として、また、ソリストとして活躍しました。金管楽器に熟知したシビルの手によって、原曲のハーモニーを生かしながら、無理のない編曲となっていることで、金管アンサンブルのレパートリーの中で高い存在感を示す曲集となっています。



- ・ Sarabande Op.40（サラバンド）
「ホルベルグ組曲」の2楽章です。この組曲はグリーグ本人によって弦楽アンサンブルに編曲されました。現在はピアノで演奏されることは稀のようです。
- ・ Brurelat Op.17 No.24（婚礼の歌）
「ピアノ協奏曲イ短調」と同時期、つまり、グリーグの新婚時代に作曲された「25のノルウェーの民謡と踊り」に含まれています。婚礼の日の浮かれた雰囲気が描かれています。
- ・ Ballade Op.65 No.5（バラード風に）
「抒情小曲集第8集」に含まれます。ノルウェー民族音楽の影響を強く受けた陰鬱な響きの曲です。
- ・ Bryllupsdag pa Trolldhaugen Op.65 No.6（トロールハウゲンの婚礼の日）
同じく、「抒情小曲集第8集」に含まれます。銀婚式の年、ニーナの誕生日に贈られた曲で、婚礼の日の楽しい雰囲気が感じられます。なお、この曲のみが、原曲から割愛された部分があります。

C. ドビュッシー：シャルル・ドルレアン の 3 つの歌 C. Debussy : Trois Chansons de Charles d'Orleans

音楽史上、20世紀の輝かしい幕を開いたのはクロード・アシル・ドビュッシーでした。

1862年フランスに生まれたドビュッシーは、叔母にピアノの手ほどきを受けたのをきっかけに才覚をあらわし、10歳でパリ音楽院に入学、同門に3歳年下のポール・デュカがいるなか、エミール・デュランに和声学を、アーネスト・ギローに作曲を学び、1884年にカンタータ「放蕩息子」でローマ大賞を獲得しました。

「印象主義」と呼ばれる彼の音楽には、それまでには存在しなかった「ぼかし」のかかった和音や調性が多用されており、輪郭がはっきりせず曲の進行に強い色彩を用いない霧のような雰囲気が漂っています。

「印象主義」、「印象派」とはもともと絵画の世界で使われていた言葉で、フランスの画家クロード・モネが「印象・日の出」という有名な作品を描いたとき、それがあまりにぼんやりとして抽象的だったため批評家たちは皮肉の意味を込めて「impressionism（印象主義・印象派）」と称したことが始まりですが、ドビュッシーは音楽において歴史的に非常に注目すべき新たな表現方法（筆使い）を生み出し、その筆で何とも美しい音楽の絵を数多く描きあげ、聴く人々をうっとり魅了し続けています。

ドビュッシーの創作の中心は管弦楽曲、ピアノ曲、独唱曲であったため、合唱曲は中でも特別な位置にありました。この「シャルル・ドルレアン の 3 つの歌」は、意外にも彼の書いた唯一の無伴奏混声合唱曲です。

この曲の歌詞である散文詩を書いたシャルル・ドルレアンは、中世のフランスにおける有名な詩人で、現在でも多くのフランス名詩集にその名を連ねています。彼はフランスの重鎮オルレアン家の長男で、敵対するブルゴーニュ家に暗殺されたルイ・ドルレアンを父に、腹違いの弟がジャンヌ・ダルクの朋友デュノワ伯、息子が後のルイ12世という豪華な顔触れを持つ当時から有名な人物でした。アザンクール戦の後にイングランド軍に捕まり、25年間幽閉されながらも絶えず故国を憧憬し多くの詩を書き続けました。

この合唱曲を書いた頃のドビュッシーは印象主義的な独特の作曲技法を駆使し、次々と大作に取り組んだ円熟期を迎えていました。この歌の中の第1曲と第3曲は、ドビュッシーが36歳の時に友人のルシアン・フォンテーヌが設立した合唱団のために作曲した作品で、第2曲はそれからさらに10年後に作曲されたものです。ドビュッシーはこのシャルル・ドルレアンの詩を、「あまりに甘美でひそやかな音楽に満ちているの

で、私は——— それをそのまま——— 具体化せざるを得なかった」と語っています。

シャルル・ドルレアンがこの美しい韻文詩に運命の糸を手繰り寄せられたかのように出会ったドビュッシューは、彼の色鮮やかな音楽で美しく詩を飾り、花のように甘く香る風が頬をそとなでていくような温度さえ感じさせる、曖昧で色香溢れる作品に仕立てあげています。

第1曲では、霧のベールがぼんやりとかかったような、寄せては返す小波のように時折不安気に動く内声部の響きを伴った旋律が、手の届かない憧れの女性への胸の内に秘めた切なく揺れ動く想いを歌いあげていきます。冒頭の "Dieu!" (ああ!) は言葉にならない溜め息のようであり、まさに詩人と音楽家双方の切ない想いがこの一言に込められています。

第2曲では、朝もやのなか森の奥から聞こえてくる祭り太鼓の音で目覚めたものの、もう少し夢の続きを見ていたいというけだるい朝の情景が、「静」と「動」の対比によって美しく織りなされていきます。原曲では旋律をアルトソロが凜として歌っています。

第3曲では、寒く厳しい冬に対する嫌悪と心地良く楽しい夏への想いを、言葉の微妙なニュアンスを大切にしながら自然への豊かな情感とともに見事に表現しています。

Dieu! qu'il la fait bon regarder

「ああ、あこがれの人」

*Dieu! qu'il fait bon regarder
La gracieuse bonne et belle!
Pour les grans biens que sont en elle
Chacun est prest de la louer.
Qui se pourroit d'elle lasser?
Tousjours sa beaute renouvelle.
Dieu! qu'il fait bon regarder,
La gracieuse bonne et belle!
Par de ca, ne de la, la mer
Ne scay dame ne damoiselle
Qui soit en tous bien parfaits telle.
C'est ung songe que d'i penser:
Dieu! qu'il la fait bon regarder!
Dieu! qu'il la fait bon regarder!*

ああ、あこがれの人
気立てよく 美しく 風情ある婦人を・・・・・・!
彼女にそなわる大いなる宝ゆえ
誰しも彼女を讃えずにはいられない
誰が彼女に知らぬふりでいられよう?
その美しさは日に日にあらたまる
ああ、あこがれの人
気立てよく 美しく 風情ある婦人を・・・・・・!
海のこなた また彼方にも
これほどすべてに完全なひとは
人妻であろうと娘であろうと私は知らぬ
思うだに 夢のようなひと
ああ、あこがれの人!
ああ、あこがれの人!

Quant j'ai ouy le tabourin

「太鼓の音が聞こえても」

La la la la

ラララ・・・・・・

*Quant j'ai ouy le tabourin
Sonner pour s'en aller au may,
En mon lit n'en ay fait affray
Ne leve mon chief du coissin;
En disant: il est trop matin
Ung peu je me rendormiray.
Quant j'ai ouy le tabourin
Sonner pour s'en aller au may,
Jeunes gens partent leur butin;
De non chaloir m'accointeray
A lui je m'abutineray
Trouve l'ay plus prouchain voisin;*

五月を告げて鳴らしていく
太鼓の音が聞こえても
寝床の中で 私は動じない
枕から頭を挙げさえない
こう言うだけさ まだ早すぎる
もう少しまどろむとしよう
五月を告げて鳴らしていく
太鼓の音が聞こえても
若い衆が獲物を分け合っているも
私にはなんのかわりもない
私は彼から獲物を貰おう
もっと親しい隣人を見つけてもあるから

*Quant j'ai ouy le tabourin
Sonner pour s'en aller au may,
En mon lit n'en ay fait affray
Ne leve mon chief du coissin.*

五月を告げて鳴らしていく
太鼓の音が聞こえても
寝床の中で 私は動じない
枕から頭を挙げさえない

La la la la

ラララ・・・・・・

Yver, vous n'êtes qu'un villain

「冬はきらいだ」

Yver, vous n'êtes qu'un villain.
Este est plaisant et gentil
En temoing de may et d'avril
Qui l'accompagnent soir et main.
Este revet champs, bois et fleurs
De sa livree de verdure
Et de maintes autres couleurs
Par l'ordonnance de nature.
Mail vous, Yver, trop estes plein
De nege, vent, pluye et grezil.
On vous deust banir en exil.
Sans point flater je parle plein:
Yver, vous n'êtes qu'un villain.

ああ、冬はきらいだ
夏は 気持ちよく 優しい
夕べに朝に いつも彼と共にいる
五月、四月の証言によれば・・・
夏は 自然の命ずるままに
野原や森に緑のお仕着せを
また花々は色とりどりに
装わせてやるのだ
が、冬よ、おまえは
雪 風 雨 霰 そんなものばかり
追放令に会ったとて当たり前だ
お世辞は使わずきっぱり言おう
冬はきらいだ

今日は、ドビュッシーが作曲したこの無伴奏合唱曲をトロンボーン 4 重奏の編曲でお送りします。詩人の歌、作曲家の想いに演奏者たちの夢が接ぎ木された、美しく幻想的な響きをお楽しみ下さい。



B . ピーチ : 金管 5 重奏のための音楽

B. Beach : Music for Brass Quintet

ベニー・ビーチは、1925年7月10日アメリカのミシシッピ州に生まれました。1948年にクリーヴランドにあるデルタ州立大学を卒業し、クリーブランドのバンドディレクターとして活躍、1950年の夏には、ナッシュビル交響楽団のメンバーとなった一方で、ピーボディ＝ヴァンダービルト (Peabody-Vanderbilt) で院生として学び、修士を取得しています。その後ナッシュビル交響楽団での活動の続けながら、ウェスタン・ケンタッキー大学で音楽を教えていましたが、1970年には、ナッシュビル交響楽団を退団し、また1981年にはウェスタン・ケンタッキー大学も退職、1990年以降は、ケンタッキー州のボウリング・グリーンやフロリダ州のサンタ・ローサ・ビーチで過ごし、作曲活動にいそんでいます。

ビーチは、主に器楽家(トランペット)ですが、声楽のためにも広く作曲をしており、器楽、声楽の両分野での作品を発表しています。大学退職後は、演奏というより作曲を中心にしており、音楽を作るために調性や無調の研究に取り組んできました。これらの成果として、無調の調和 (HARMATONALITY) という言葉を新しく創り出しました。そして「Harmationality」という曲を8重奏(2つのトロンボーン4重奏)向けに作曲しており、連続的で不協和でない音楽を演出するために、伝統的でハーモニックな技術と12の無調な音とを結びつけた作品となっています。

本日演奏する「金管5重奏のための音楽」に関しても、ビーチの研究の中心となった“無調の調和”が取り入れられているのではないかと思います。果たして、我々はその効果を発揮することができるのでしょうか・・・

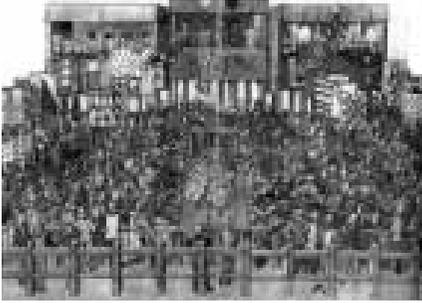


B . オール : 金管10重奏のためのトーナメント

B. Orr: Tournament for ten piece brass ensemble

ブクストン・デブリッツ・オールは、1924年イギリスのグラスゴーにて芸術一家のもとに生まれた。最初は薬学の道に進もうとしたが、30歳近くになって音楽の道に転向し、作曲家、指揮者として活躍後、教師として後進の指導にあたった。若い時代はモダンな実験的音楽を試みたり、映画音楽やテレビ音楽を中心に作曲してきたが、1965年にギルドホール音楽学校の教師に就任してからは、円熟味を帯びた保守的とも言える作品を多く書くようになっていった。

彼が生涯を通じて積極的に作曲したのが、金管バンドや管楽アンサンブルのための作品であり、フィリッ



ブジョーンズ・ブラスアンサンブル (PJBE) のために「ブラスバンドのためのカレドニア組曲」等も編曲している。

彼の全ての作品に共通して言えることは、和声や色彩よりも、まず第一に旋律を重要視したことである。そして全ての作品はルネサンス音楽の様式に基づいて作られており、見事な技術を伴った対位法が用いられている。これは、室内楽作品に限らず、大編成オーケストラの作品においても同様に見られる特色である。

その彼の作品の中でも代表的なものが1985年にロンドン・ブラスにより委嘱されたこの「金管10重奏のためのトーナメント」である。「トーナメント」とは、中世の騎士の間で盛んに行われてい

た「馬上槍試合」を意味する。この作品はまさに馬上槍試合の様子を音楽により表現しているものである。

トーナメントは12～14世紀のヨーロッパにおける若い騎士の鍛錬の場であったとともに、武勇が華やかに示される典礼の場として盛んにとり行われた。しかしながらその真の目的とは、王侯貴族の暇つぶし、貴婦人との恋愛を求める社交の場であったようだ。騎士は、トーナメントで勝利を得るとその賞金とともに名声と貴婦人を手中に収めることができた。槍試合では時に死を伴うことさえもあったが、その目的を果たすために騎士たちは日々鍛錬を重ねた。また、試合での衣装も極度に華美（当時、平民階級は茶・灰色等の服装しか身につけることを許されていなかった）なものとなり、流行の衣装を手に入れるために家を売ったりすることもあり、また貸衣装屋までもが存在していたようだ。



トーナメントの開催日には、各地から騎士たちが群をなして駆けつけ、美しく飾られた都市へ華々しく入城する。そして騎士たちもまた、華美に飾り立てた姿を前もって周囲に披露するのである。

イントラダ（前奏曲）が鳴り響き、紋章官が名前を読み上げ、記章が配られる。貴婦人たちが見つめる中で、試合が始まる。団体戦で2～3の陣営が入り乱れて衝突する。祭りが最高潮を迎えるのは一騎打ちの場面。これこそが騎士たちの栄光と褒章にふさわしい槍試合の名人芸がじっくりと披露されるときである。それはある意味で求愛行動でもあり、貴婦人の前で繰り広げる求愛のダンスなのである。

オールは、トランペットとトロンボーンとの相互の技巧的な競演をトーナメントに見立てた。トランペット2本とトロンボーン2本が1つの陣営をつくり、それらが左右に分かれて配置される。中央に鎮座するチューバとホルンは王と王妃とを表している。7つの曲により、その様子の一部始終が演奏される。

1. イントラダ

アンティフォナ（2つの合唱隊により交互に詩篇を歌うこと）風のファンファーレにより開幕を告げる。

2. 全員の踊り

試合前に全員が一斉に踊る。

3. フェイヴァーシャム嬢のファンシー

それぞれの陣営から、戦う人間を代表して夫人が紹介される。最初に若きフェイヴァーシャム嬢がピッコロ・トランペットにより軽やかに華々しくに奏される。

4. わがラルワース婦人の悲しみ

他方のラルワース婦人の悲しみの歌がフリュゲルホルンにより奏される。

5. 主題の宣告

城門が開き、王と王妃が登場する。王妃（ホルン）が古い聖歌風の旋律を歌う。この旋律がこのトーナメントの主題であり、この旋律を基に馬上槍試合が繰り広げられることになる。各陣営はその旋律に応えるように歌を口ずさみ、今から始まるうとする戦いを前に静かに闘志をみなぎらせる。

6. 馬上槍試合（一騎打ち）

王妃によって宣告された主題により、両陣営から騎士が登場する。最初は互いの様子を伺うような単純な変奏から始まり、戦いが繰り広げられる。つぎつぎと華美な装飾が施されながら、試合は激動の中ついに最高潮を迎える。最後には、両陣営が入り乱れ、これ以上優劣をつけることができず、やがて王妃から引き分けが宣告される。それぞれの陣営は、お互いを称え合い合奏する。さらには煌びやかに装飾された主題によって祝い歌い、王妃から試合の終了を告げられる。

7. 最後の踊り：総員退場

壮絶な戦いを終え、皆で陽気に軽やかに踊り明かす。最後に、開幕時の全員による踊りが再現され、閉幕を告げるファンファーレがエコーのように鳴り響き、騎士たちは散り散りに去ってゆく。戦いの足

跡だけがそこには残っている。

この作品はトーナメントの様子を音楽により表現したものであるが、実在するトーナメントと金管楽器同士により繰り広げられるトーナメントを巧みに重ね合わせ、両者引き分けという実際には有り得ない幕切れにすることによって、全員の大会奏とともに劇的なクライマックスを生み出している。

中世の騎士たちの世界に想いを馳せ、KFABが繰り広げるトーナメントをお楽しみいただければ幸いである。



伝承曲：ジェリコの戦い

The Battle of Jericho

「ジェリコの戦い」は、ユダヤ民族をエジプトの圧政虐待から開放したモーゼの意思を継いだヨシュア（ジョシュア）が、多くの同朋を連れて故国イスラエルへ帰る40年にわたる永い苦難の旅の最後の難関であったジェリコ砦での戦いの様子を描いたものです。

その戦いとは、ヨシュアが神の助けを借りて、城を取り巻いた人々に7日間にわたって牡牛のラッパ（一説によれば羊の角笛とも言われる。）を吹き鳴らさせ、鬨の声（神の栄光）を上げ続けさせることによって、ついには堅固な城壁が崩れ落ち、勝利を収めることができたというものでした。この歌は旧約聖書にあるその勝利の物語によって作られたものです。

以来「堅固なもの」の代名詞として「ジェリコ」は、使われるようになりました。今日では、黒人霊歌として広く知られていますが、これは、アメリカの黒人奴隷達が次のような詩を付けて歌ったものです。

Joshua fit the battle of Jericho, Jericho, Jericho,
Joshua fit the battle of Jericho, and the walls came tumbling down.

Joshua fit the battle of Jericho, Jericho, Jericho,
Joshua fit the battle of Jericho, and the walls came tumbling down.

You may talk about your King of Gideon,
You may talk about your man of Jericho.

Joshua fit the battle of Jericho, Jericho, Jericho,
Joshua fit the battle of Jericho, and the walls came tumbling down.

本日は、この曲をトランペットソロをフューチャーしたアレンジでお送りします。緩 - 急 - 緩の構成になっており、中間部のジャジーでスリリングなフレーズが聴きどころです。



J. クツィール：金管4重奏のための小組曲

J.Koetsier: Klein Suite Op.33 / 1A für Brass Quartett

ヤン・クツィールは、技巧的で金管楽器の特質を熟知し、それを生かした魅力的な作品を数多く生み出しているオランダはアムステルダム生まれの音楽家である。

特にブラスアンサンブルの世界においては、誰もが一度は彼の作品を演奏したいと切望しているに違いない。

「愛」を意味するオランダ語「リーフデ」という名の商船が今の大分県臼杵に漂着したのは1600年4月19日のこと。日本とオランダの歴史的な出会いの瞬間である。

2000年は日蘭修好400周年という記念すべき年であったため、オランダにちなんだ様々な催しで日本各地が彩られた。芸術分野においても、レンブラント、フェメール、ゴッホなど著名なオランダ画家たちの絵画展や、アムステルダム・パロックオーケストラ、ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団、他多くのオランダのオーケストラが来日したことも記憶に新しい。

今や日本でも非常に親しまれているビールのハイネケン、うさぎのミッフィこと「Nijntje (ナインチェ)」

も、実はオランダ生まれである。

「古くからの恋人とともに訪れたいと思う、私の夢見る国がある。」

これは、オランダの首都アムステルダムを桃源郷と呼んで憧れていた19世紀のフランスの詩人ボードレーの言葉である。

クツィールが生まれ育ったアムステルダムは、165本の運河を持ち、そしてそれに架かる橋は1300にもものぼるというまさに「水の都」であり、またチューリップの品種約2500種、世界の切り花市場の6割を占める花の王国で、「ヨーロッパの花屋」と言われるほどである。

「アムステルダムはオランダではない」

非常に国際色豊かなこの町は時にこんな風に形容され、ここでは4～5カ国語を話す人も珍しくなく、また世間からなかなか理解されない自由な精神の持ち主たちがヨーロッパ各地からこの町へと流れ込んでいる。しかし一方で、穏やかな日々を愛し、家族を大切にす人たちの普通の暮らしもある。

アムステルダムに根を下ろし暮らす人々と、この町の自由な気風に惹かれて集まってきた人たちは奇妙なコントラストを成しており、これらはまさにクツィールの音楽の根底に流れているどこにも属さず他に類を見ないオリジナリティを形作るために非常に大きな刺激になったことは間違いないだろう。

私たちはこれまでに彼の作品として、「プラスシンフォニー」、「子どものサーカス」、「グラスアウアー・ツヴァイ・ファッヒャー」を取り上げてきた。

そして今回演奏するこの「小組曲」は、彼の作品の中でもとりわけ初期のものであり、若さと躍動感に溢れ、前衛と伝統が混在する名品である。

「小組曲」に関する興味深いエピソードをご紹介します。

この作品は、1946年にアムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団のメンバーにより創設された「アムステルダム・コベル・カルテット」のために書かれた3つの4重奏曲の中の1つである。

そして1947年のコンセルトヘボウ管弦楽団ロンドン公演の折り、彼ら金管奏者たちはBBCを訪れ、ラジオサイタルへの出演を交渉し、クツィールの作品を含む約20分のプログラムを録音した。

この放送を聴いていた若き日のフィリップ・ジョーンズ氏は、彼らの演奏するクツィールの「小組曲」というモダンな作品にすっかり魅せられてしまう。彼はコベル・カルテットのトランペット奏者コムスト氏に会うためにオランダへ渡り、アンサンブルやレパートリーのことについて話し合った。そして「小組曲」の自筆スコアを写譜させてもらおうと、すぐに同じオーケストラ仲間（当時はコヴェントガーデン・オペラのメンバー）を集め、アンサンブルを始めたのである。これがフィリップ・ジョーンズプラスアンサンブル（PJBE）のきっかけであり、「小組曲」の出会いは、まさに運命的なできごとだったと言えよう。

・ Prelude

何かの始まりを予感させる、変ホ長調の明るく前向きな音楽である。

船が次々と往来する港、色とりどりのチューリップやバラが並ぶ市場で花束を買う人々。

アムステルダムの陽気で活気溢れる真昼の町並みを想像させる。

・ Air

ホルンのゆったりとした中でも緊張感を湛えた旋律が、何か不安で神秘的な雰囲気を作り出す。時に象徴的であったりしながらも、何事もなかったかのように曲を締めくくる。

・ Signal

トランペット2本の同じ旋律の掛け合いにより、曲を展開していく。

信号なのか、ファンファーレなのか、様々な想像をかきたてられる。

時に対等であり、光と影のようでもあり、向かい合っているのか、遠く離れた場所にいるのか・・・

最後は2本の響きが重なり合って鳴り響く。

・ Cantique

「聖歌」という意味を持つこの曲は、ホルンのレチタティーヴォにより導かれる。

教会で司祭は話す。「わたしと同じように歌いなさい、そうすればあなた達も幸せになれますよ。」

心の中の不安をあらわすような不安定な和音進行により、民衆たちは司祭の後に続いて祈りの歌を歌う。

日本の唱歌にもどこか似ているこの旋律は、遙か遠い昔、オランダと日本の文化の交流が確かにあったことを私たちに伝えてくれているのかもしれない。

・ March

冒頭からトロンボーンのベダルトーンで始まる技巧的な曲である。

転調・変拍子も次から次へと現れ、まさにクツィールらしさがぎゅっ詰まったどこか素直でないマー

子である。

みんな好き勝手な方角に向かって歩いたり走ったりするから時には思いきりぶつかり合ってもしまっけれど、大事な場面ではちゃんと全員で足並み揃えて「敬礼！」することもできるのだ。快活で屈折したマーチは上昇音型により輝かしく曲を締めくくる。

クツィールの音楽とはどんなものだろうか。時にお洒落であってもそれはフランス音楽の持つエスプリとは何か違うし、重厚な和音によるハーモニーもドイツ音楽の響きとは一線を画す。ジャズやスウィングのようなフレーズもアメリカのものではない。転調のさせ方、不協和音の響き、目まぐるしく変化する拍子、どれを取ってみても斬新であり、他に類を見ない。まるで目の前の風景が快速に通り過ぎて行くかのようにドラマティックな曲の展開を見せたと思えば、予想を全く裏切るようなあっけない幕切れだったり、ちょっとひねってあったり、そしてこれまでに聴いたことのないエキセントリックで美しい音楽。

様々な国籍が混在し、自由奔放を求めて集まった個性のひしめき合う、そして一方で伝統を重んじ穏やかに文化を継承していくコントラストを持つ。そして街角にはいつも音楽が溢れ、人々はカフェでカプチーノを片手に様々な会話に花を咲かせる。そんな町「アムステルダム」の気質こそ、クツィールの音楽そのものではないか。

本日はチューリップの花束のように明るくて温かい、そしてモダンで新しいセンスと発想が溢れる町アムステルダムの風景を、このステージいっぱい描き出したいと思う。



J. Brahms: Ungarische Tänze Nr. 5

J. Brahms: Ungarische Tänze Nr. 5

ドイツ生まれのブラームスは、若い頃からハンガリーの音楽に多大な興味をもっていたようです。このハンガリー音楽とは、ハンガリー・ジプシー音楽のことです。

ブラームスは、1853年にハンガリーの名ヴァイオリニストのエドヴァルド・レメニーと組んで演奏旅行に出かけました。当時、ブラームスは新進ピアニストとして知られていましたが、彼は旅行中に、レメニーからハンガリー・ジプシー音楽を教えられ、その知識を得ると共に、ますます関心を深めていきました。この影響は意外に大きく、ブラームスは生涯のうちにハンガリー風の作品を幾つも残すこととなりました。その中でも最も有名なのがこの「ハンガリー舞曲」です。

彼はジプシーの旋律を採譜し、自分の作品としてではなく「編曲」として1869年にピアノ連弾（4手）用として「ハンガリー舞曲 第1集（第1～5番）、第2集（第6～10番）」を出版しました。その後1880年に第3集（第11～16番）と第4集（第17～21番）が出版されました。

ハンガリー舞曲21曲はすべて4分の2拍子で書かれています。このハンガリー舞曲は、ハンガリー・ジプシー舞曲のチャルダッシュを素材としているため、遅い舞曲と急速な舞曲とを組み合わせています（いわゆる*ラッスとフリスである）が、リストのハンガリー狂詩曲のようにチャルダッシュの形式に忠実には従っておらず、自由な形式で作られています。楽想がかなり都会化されているのも特徴といえるでしょう。

ハンガリー舞曲は、ブラームス自身が、また他の作曲者達によって、いろいろな編成に編曲されています。本日演奏する第5番は、エンバイヤプラスのトランペット奏者のR. スメドヴィックが金管5重奏用にアレンジしたものを取り上げます。

*ラッス (lassu) とフリス (friss)チャルダッシュ舞曲の中のゆるやかな導入部をラッシュ、急速な主部をフリスといいます。



A. Dvorak: Slovanske tance Op. 46

A. Dvorak: Slovanske tance Op. 46

スラヴ舞曲第1集（作品46）は1978年ドヴォルジャークが36歳の時の作品であり、彼の名を全世界にどろかせた出世作として知られ、チェコ舞曲の代表作として知られています。今回演奏する第8曲を語るにおいては「フリアント」と称されるボヘミア舞曲独特のリズムを避けて通るわけにはいきません。「フリアント」のリズムは3拍子を基本として交互に現れる2/4拍子と3/4拍子の特徴としていますが19世紀以

来の様式化された作品では全体が3/4で書かれています。ドヴォルジャークは「フリアント」のリズムをスラブ舞曲第1集以外で交響曲や室内楽曲のなかでスケルツォの代わりに用いており、彼がチェコ国民楽派の作曲家の1人と称されるゆえんでもあるでしょう。

ドヴォルジャークの生家は肉屋を兼業する居酒屋で非常に庶民的な家庭だったようです。父親は音楽好きとはいえ、ゆくゆくは家業を継がせるつもりでいました。13歳の時に、肉屋の修行と当時の肉屋職人の技術証明に必要なドイツ語の修行のため、ズロニツェという町へ修行に出ます。彼のドイツ語の先生だったリーマンは優秀な音楽家でもあり、ドヴォルジャークは彼からドイツ語だけでなく様々な楽器の演奏法と実用的な和声楽など作曲家としての基礎を学ぶこととなります。周囲の薦めもあって音楽の道に進んだドヴォルジャークは音楽（オルガン）学校を卒業すると、オーケストラのピオラ奏者としてコムザーク、スメタナなど当時のチェコの一流級の指揮者のもとで演奏をしていました。また1863年にはヴァーグナー（ワーグナー）が自作を演奏するためにブラハを訪れ、この時ピオラ奏者としてドヴォルジャークも演奏に参加しています。

ドヴォルジャークが作曲家として大きく飛躍するのは1874年、33歳の時です。オーストリア政府が若くて有能だが貧しい芸術家を援助するために設立した奨学金に応募し、翌年これを獲得します。このときの審査員がブラームスと音楽評論家のエドゥアルト・ハンスリクでした。この2人は単なる審査員という立場を超えて、チェコの当時は無名だった作曲家のために出版社に掛け合ったり、著名な音楽家に紹介したりと援助を惜しみませんでした。この時ブラームスが紹介した出版社がベルリンのジムロック社でした。1877年ジムロック社から出版された「モラヴィア2重唱」が大好評を収め、同社はブラームスの「ハンガリー舞曲集」に相当するような舞曲集の作曲をドヴォルジャークに依頼します。こうしてできたのが「スラブ舞曲集」でした。「スラブ舞曲集」は当初ピアノ連弾譜として完成されましたが出版と同時に大変な人気を呼び、管弦楽用編曲がなされると各地のオーケストラで演奏されるようになりました。本日はデビッド・ステュワートの編曲に打楽器を加えた13人で演奏します。皆様と一緒に激しくも純朴でどこか土の香りがするメロディーでスラブ地方への想いを馳せてみたいと思います。



G. Bizet: Carmen

G. Bizet: Carmen

ジョルジュ・ビゼーは、1838年生まれのパランスの代表的作曲家である。父は声楽教師、母もピアノに長じていたため幼時から音楽に親しみ、9歳でパリ音楽院に入学、ピアノをマルモンテルに、作曲をアレヴィ（後にその娘と結婚）に学んだ。

1857年に18才で懸賞オペレッタ「ミラクル博士」に応募し当選、その年ローマ大賞をうけてローマに留学した後、1960年に帰国後はパリに住んで作曲に専念し、生涯に28もの劇作品を発表した。（彼は、多くの作曲家のように外国への旅行や移住もせず、全作品をパリで発表したのである。）

ビゼー最後のオペラ「カルメン」は彼の最大の傑作であり、今日彼のオペラの中で一般に上演される唯一の作品でもある。

30代のビゼーはパリ・オペラ・コミック劇場よりオペラ制作依頼を受け、その題材として実話を元にしたプロスペル・メリメ（1803～1870）の小説「カルメン」の地方色豊かで、情熱的な内容に注目し、1874年、天才的な筆致でこれを音楽と音楽を台詞によってつないでいくオペラ・コミックの形式で歌劇化したのである。しかし、このオリジナル「カルメン」の完成までに、この題材に対して、依頼主であるオペラ・コミック劇場が、「柄のよくない人物が舞台に多数登場し、人殺しが堂々といわれる点が劇場の伝統に反する。」と主張し、難色を示した。そのため台本作者のアレヴィが彼らの間に立って、妥協案を示し、ようやくまとめられた。

このようにして作られた「カルメン」は、原作と比べ筋や人物設定が相違しており、たとえば、カルメンやホセの性格が弱められていたり、ホセの婚約者として登場するミカエラが創造されている。

初演は1875年3月3日、パリ・オペラ座であるが、聴衆の反応も批評も良くなかったというのは有名な話で、これによりビゼーの死が早まったとまで言われるほどである。

その後、ウィーン宮廷歌劇場の支配人、フランツ・ヤウアーより、ウィーンでの上演のため、台詞の部分に作曲してレチタティーヴォ（オペラの「アリア」に対して、「語り調」となる部分のこと）とするように助言されたが、ビゼーがその年の6月3日に37歳の若さでこの世を去ったため、友人のギローがこの部分の作曲を担当し、1875年7月23日にウィーンで今日私たちが耳にしている主に台詞と歌唱の中間的な唱法で歌われるレチタティーヴォ付きの初演が行われている。

その後のビゼーの追悼公演で「カルメン」が上演されたが、この時初めて聴衆はこの作品の持つ価値を認

演奏会の軌跡

第 1 回演奏会 1994 . 7 . 3 青山音楽記念館
(バロックザール)

第 1 部

- W. バード：オックスフォード伯爵のマーチ
- J.S. バッハ：
プレリユードとフーガ ホ短調 BWV. 555
- B. マリーニ：4 声のためのカンツォーナ 作品 8
- M. プレトリウス：テレシコーレの舞曲 (1612)
- C. ジェルヴェイズ & P. アテナン：
フランス・ルネッサンス舞曲集

第 2 部

- L. パーンスタイン：ウエストサイド・ストーリーより
 - L. サルゼド：金管 6 重奏のための喜遊曲
 - C. ヘイゼル：「3 匹の猫」
 - G. ラングフォード：ロンドンの小景
-
-

第 2 回演奏会

名古屋：1995 . 7 . 2 名古屋電気文化会館
ザ・コンサートホール
京 都：1995 . 7 . 9 青山音楽記念館
(バロックザール)

第 1 部

- G. P. ヘンデル：シバの女王の入城
ヘンリー 8 世：組曲「刺のないバラ」
ホルン 4 重奏
G. シャントル：さあ、狩りにいこう！
作曲者不明：狩りから、家路へ・・・
- L. ヴィアダーナ：シンフォニア「ラ・パドヴァーナ」
- G. ガブリエリ：カンツォン・セプティミトニ No.2

第 2 部

- G. ビゼー：「カルメン」組曲
- H. カーマイケル：スターダスト
- G. ドビュッシー：亜麻色の髪の乙女
成田 為三：浜辺の歌

第 3 部

- A. アルチュニアン：アルメニアの情景
 - J. ホロヴィッツ：ミュージック・ホール組曲
 - J. クツィール：プラス・シンフォニー
-
-

第 3 回演奏会 1996 . 1 . 15
京都コンサートホール (小ホール)

ファンファーレ

P. デュカ：バレエ組曲「ペリ」より ファンファーレ

第 1 部

- G. ガブリエリ：ピアノとフォルテのソナタ
- A. ドヴォルジャーク：ユーモレスク
- A. I. ハチャトゥリアン：剣の舞
- E. ハワーズ編曲：4 つのスイス・チューン
- J. パーカー：組曲「ニューヨークのロンドンっ子」

第 2 部

- 黒人霊歌：ジャスト・ア・クローサー・ウォーク
パート別アンサンブル
Trumpet / Horn / Trombone / Baritone & Tuba
- J. クツィール：子供のサーカス

第 3 部

- M. ラヴェル：ボレロ
-
-

第 4 回演奏会 1996 . 9 . 23

京都コンサートホール (小ホール)

第 1 部

- 作者不詳：アジンコート・ソング
- G. ファーナビー：小品集
- G. F. ヘンデル：調子のよい鍛冶屋 (アリアと変奏)
- M. プレトリウス：「テレシコーレ」舞曲集 (1612)

第 2 部

- Z. アヴレウ：ティコ・ティコ
 - R. ロジャーズ：サウンド・オブ・ミュージック
ビートルズ作品より：
ペニー・レーン & オブラディ・オブラダ
 - M. カルベルト：組曲「モンテレジャン・ヒルズ」
 - W. ウォルトン：
「スピットファイア」プレリユードとフーガ
-
-

第 5 回演奏会 1997 . 3 . 23 青山音楽記念館
(バロックザール)

V. エヴァルト：

- 金管 5 重奏曲：第 1 番 変口短調 作品 5
- 金管 5 重奏曲：第 2 番 変ホ長調 作品 6
- 金管 5 重奏曲：第 3 番 変ニ長調 作品 7
- 金管 5 重奏曲：第 4 番 変イ長調 作品 8

第 6 回演奏会 1997 . 9 . 21
京都府民ホール "アルティ "

第 1 部

- J. ムーレ：交響組曲より「ロンドゥー」
- G. F. ヘンデル：
クセルクセスより「オンブラ・マイ・フ」
- A. ヴィヴァルディ：
4本のトロンボーンのための協奏曲
- J. S. バッハ：主よ、人の望みの喜びよ
- G. F. ヘンデル：水上の音楽

第 2 部

- 民謡 / G. F. ヘンデル：セインツ・ハレルヤ
- D. ユーバー：ありし日の草競馬
- L. バーンスタイン：ダンス組曲
- S. ジョプリン：イージー・ウィナーズ
- R. プレムル：ディヴェルティメントより 5 つの楽章

第 7 回演奏会 1998 . 8 . 23
京都府民ホール "アルティ "

第 1 部

- C. ドビュッシー：
劇付随音楽「リア王」よりファンファーレ
- C. ドビュッシー：ゴリウォッグのケーキウォーク
- E. ボザ：森にて（ホルン独奏：野々口 義典）
- M. ラヴェル：亡き王女のためのパヴァーヌ
- H. トマジ：典礼ファンファーレ

第 2 部

- H. マンシーニ：ピンクパンサー
- I. アルベニス：セヴィラ
- M. ロドリゲス：ラ・クンパルシータ
- C. ヘイゼル：スター・ゲイジング
- H. マンシーニ：酒とバラの日々
- J. ガーデ：ジェラシー

第 8 回演奏会 1999 . 9 . 5
京都府民ホール "アルティ "

第 1 部

- M. フランク：イントラダ
- S. シャイト：「音楽の楽しみ」より
「戦のガイヤルド」「悲しみのクーラント」
「アングルのベルガマスカの模倣によるカンツォーナ」
- D. スカルラッティ：「ソナタ集」より
K380、K430、K443

J. S. バッハ：
カンタータ140番より「目覚めよ、と呼ぶ声が聞こえ」
H. パーセル：アプデラザール組曲

第 2 部

- B. モンテルデ：マカレーナの乙女
- G. バルボトゥー：シャンソナリー
- J. クツィール：
グラスアウアー・ツヴァイ・ファッヒャー
- S. ソンドハイム：センド・イン・ザ・クラウンズ
- G. リチャーズ：高貴なる葡萄酒を讃えて

第 9 回演奏会 2000 . 3 . 12
青山音楽記念館（バロックザール）

第 1 部

- L. マウラー：「金管 5 重奏のための小品集」より
- M. アーノルド：金管 5 重奏曲 第 1 番

第 2 部

- F. ブーランク：ホルン、トランペット、トロンボーン
のためのソナタ
- E. クレスポ：組曲「アメリカーナ」第 1 番

第 10 回演奏会 2001 . 3 . 4
京都府民ホール "アルティ "

第 1 部

- R. シュトラウス：
ウィーン市の祝典音楽からのファンファーレ
- E. グリーク：作品集
- C. ドビュッシー：シャルル・ドルレアンの 3 つの歌
- B. ビーチ：金管 5 重奏のための音楽
- B. オール：金管 10 重奏のためのトーナメント

第 2 部

- 伝承曲：ジェリコの戦い
- J. クツィール：金管 4 重奏のための小組曲
- J. ブラームス：ハンガリー舞曲第 5 番
- A. ドヴォルジャーク：
スラブ舞曲集 作品 46 より第 8 曲
- G. ビゼー：カルメン

素顔のKFAB

10回記念回想特集

通常の団体紹介やメンバー紹介ではなく、我々がKFABの普段の姿をおもしろおかしく紹介しては、と考えたこの企画。その前身であった団体紹介を含め、今回はや 8 回目の執筆となる。いつもはどたばた喜劇風に、にぎやかにドンチャンとやってきたのであるが、今回は記念すべき第10回演奏会であることを口実に、少しシリアスにそして素顔のもっと奥深くにある本性を、10回のヒストリーを紹介する切り口であぶり出してみたい。

10回の足跡

94年の第1回演奏会にはじまった私達の演奏会であるが、これまでの演奏会履歴をざっと振り返るとこんなことになっていた。自主公演では、演奏曲数はタイトルアップベースで94曲、取り上げた作曲家は71名。編成は平均で7.4重奏、最小が3重奏、最大が13重奏（全員での演奏を除く）。開催場所である「ハコ」つまりホールは、本日おこし頂いている京都府立府民ホール「アルティ」を含め京都で3ヶ所、名古屋で1ヶ所。それから、招待演奏や他団体との合同演奏の機会にも恵まれた。私達には特に行事として決めた演奏旅行はないのだが、それでも演奏を伴う旅行も、三重、富山、長野をはじめ全国8つの県にまたがった。ふう。

ブラスアンサンブルのレパートリーでは曲数を正確にカウントするのがなかなか難しいのだが、この7年の間は、毎年10.1人の作曲家、13.4タイトル以上の作品の出会いを経験し、それを2年毎に新たなハコで演奏し、また毎年1つ以上の演奏旅行を企て実行していた、ことになる。例えば、年に2回の定期公演を行う一般管弦楽団や吹奏楽団などであれば至極普通の数字であろうが、私達が金管楽器による室内楽編成に特化したものである点を考えると、我ながらいいペースであったと振り返ることが許されよう。

片手間でやるブラスアンサンブルではなく本格的な活動を、と考えた結成当初の思いは並々ならぬものであったのだが、それでも当時はどれだけの活動が展開して行けるものか見えない部分も多く不安一杯というのが正直なところであった。やりたい曲はいろいろあれど、手持ちのレパートリーではその数が10回の演奏会すら維持できないし、他団体との掛け持ち主体の活動であるし、メンバーの居住地域は東西に600km超に散在しているし、といった具合である。しかしながら今となってはそんな心配は何処吹く風よ。94タイトルを消費したにもかかわらず候補曲リストは増加しつづけ、音源CDもますます充実し、練習は月に1度の合宿形式の練習&宴会スタイルが定着し、私など名古屋がすぐお隣に感じるようになり、逆に遠方のメンバーがわが家に入ってくるときは「ただいまー」と言うまでになってしまったのである。動機ついた人間のしかも集団の行動の強さであろうが、そもそもブラスアンサンブルとはそれだけ楽しいものであることは間違いない。えっ、俺達がマニアだからって。そうです、私達はブラスアンサンブルマニアに違いありません。

10回の変化

先日我が家のKFAB記録なるものをひっくり返してみると、第2回の演奏会を終了した時の通信紙が出てきた。その名も「ふぁいん ああつ」。内容は自主演奏会のお疲れ様メッセージ、ベルリンフィルブラスクインテット他の演奏会感想やクリニック議事録、次回練習案内、関連演奏会スケジュールや身内の結婚式日程、次回演奏会の予算案提案、等々である。当時はB5の6面程度の団内通信紙を事務局から不定期に郵送し、団の運営議事録や演奏会情報等を全員で共有していたのである。それなりのボリュームとなるこの通信紙は事務局では膨大な編集作業であったが、遠方でなくとも顔を合わせる機会が比較的少ない私達にとってはこの「ふぁいん ああつ」は貴重な情報源であり、それが郵便ポストに届くのを心待ちにしていたものであった。

その後95年後半からはFAXが入りはじめ、96年には各メンバーに導入の嵐が吹き荒れ、おのずからこの通信紙は郵送を廃止しFAX化されることとなった。97年からは電子メールでの配信も併用し始め、その後メーリングリストによる配信へと変化した。現在では全団員が電子メール環境にあり、嵐の勢いであったFAX配信もついに廃止された。時代の変化であると言えばそうなのであるが、それにしても私達のような活動ではこういったツールの進歩は本当に助かるのだ。より多くの情報が、すばやくしかも双方向に配信可能であり、情報の共有化に役立ち・・・ん！どっかで聞いたことあるなあ。そしてもっぱら今のはやはり「モバイル化」である。PalmやCEなどのモバイル端末を持つ団員はついに10名を超えた。携帯電話のメール転送を利用するケースも増えてきた。合宿での運営議事録はその場で飛ばしてしまうというも珍しくなくなってきた。まさにITを地で行く団体なのである。そして新しいもの好き人間が多いのである。

一方、配信される内容は実は今でも6年前のそれと大方向同じ内容でだし、同じ論調なのである。郵便の時代よりも間違いなく多くの情報が行き来しているのだが、その実、物事の見方や価値観は大きく変わっていない気がする。姿形は変わっても、ソフトや文化はその方向を変えることなく膨らみ活きていることを実感しているところだ。なかなか興味深い点だと言えよう。

10回のこだわり

マニアのやることにはこだわりがあるものだが、ご多聞に漏れずKFABもブラスアンサンブルマニアぶりをここに発揮している。その一面をご紹介します。

ひとつは使用楽器のこだわりである。本日ステージに乗る楽器は全部で40台余りにのぼる。あれ、メンバーは20余名しかないのになぜ？と思われた方もいらっしゃるであろう。もともとブラスアンサンブルは金管楽器だけで大きな楽曲までも演奏しようとするため、演奏者には幅広い音域や音色が要求される。こういったことを実現するひとつの手段として楽器を持ち変える手があるのである。作曲者もまたそのことを理解していて、事細かに楽器の指定をしているケースが多いのだ。こういう世界に慣れ親しんでいるからか、楽器の持ち替えには抵抗のないメンバーが多く、むしろ所望とする音色を得るためなら、「お買い上げ」すらもいとわないケースが散見されるのである。もちろんこのことは打楽器も例外なく当てはまることは言うまでもない。

実は、第1回の演奏会では使用楽器リストなるものをパンフレットに掲載したことがあるが、ブラスアンサンブルを深く掘り下げると、「お買い上げ」状況はとどまるところを知らず、今や誰が何本の楽器を駆使しているのか正確な数値は不明である。しかしメンバーの皆さん、目的はあくまでその音域、音色を得るためですよ。決して日常のストレスのはけ口にははいけません。

さて、作曲者が演奏家に残した唯一のメッセージは言うまでもなく楽譜だ。どのような情景や感情を再現すべきか、どのような音色がほしいか、といった最低限のことは楽譜に記載されているわけであるが、楽譜に書かれたものが全てであるはずがないことも、これまた自明である。楽譜に記載された言葉はその当時の語感に支配されているはずだし、文化的にも異国のものだからそのディテールは伝わりようがない。そもそも音楽をいくら言葉で説明しても、どだいその全ては表現することはできないのだ。しからは、その意図はいかに感じとるのか？それには作曲者の音楽観のみならず恋愛、生活等の価値観、時代背景、社会変化等を研究することが必要だ。私達の音楽に対するこだわりはここにもある。

過去9回のパンフレットの楽曲解説はB5面に換算してなんと50枚にのぼる。金管アンサンブルでは最も有名な5重奏と言っても過言でないV.エヴァルトの特集時にはB5換算で24枚の付帯資料を発行したこともあったし、H.トマジの「典礼ファンファーレ」の時にはオペラの対訳を延べ10枚添付した。こういった臨時追加資料を含めると、1回の演奏会平均で10.4枚の曲目解説を書いたことになる。もちろん枚数だけが全てではないし、押し付けになることも避けたいところであるが、それでも、こういった研究の成果の一部はご来聴頂いている皆さんと共有したいし、そうすることでわれわれKFABの思いを聴覚視覚以外から感じていただけることになっているのだと信じてやまないのである。

10回の人

音楽は感情を表現するものである。したがって、演奏者が何を感じどういう気持ちで取り組んでいるのか、聴衆に如実に伝わる、そういう類のものだ。結成当初のメンバー構成においては11名であった独身者も、現在は6名に減少した。子供をもつ団員も増加し、団内に2組の夫婦も誕生した。それでも94年の結成当初は16名であった団員も、数名の出入りを経て現在は24名と、結果的には安定漸増路線を歩んできたことになる。一般に団の拡大と共にややもすると人間関係は希薄になりがちなものであるが、KFABに限ってはその人間関係を現在も崩すことなく楽しんでますよ。そしてこのことこそ10回にわたる私達の歴史の中で最大の財産だと思う。そして、このことをなし得たのはわれわれメンバーだけでなく、わがままを支えてくださった家族、技術指導頂いた先生方、運営のご支援ご協力頂いた方々、あしげに通っていただいた聴衆の方々、のおかげであると真に思う。ここであらためて感謝をしたい。いつもありがとうー！そしてこれからもよろしく！

また、演奏者どうしの横つながりもずいぶん増えた。すぐご近所にはこれまた濃い活動を展開されている近衛金管ブラスの皆さんがいるし、私達の演奏会を聴きにきてくれたことがきっかけで始まった上越ブリリアントブラスの面々との交流もずいぶんと刺激になった。NABEO（日本アマチュアブラスアンサンブル組織）の組織的つながりもたくさんできた。それからこのご時世、ネットつながりを含め国内にとどまることなく海外のブラス仲間もたくさんできた。いつの頃からか団内に涉外係も設けた。人のつながり、これぞKFABの身上だし、これからも大切にしたい文化である。

次は20回だ！

ちょっと暗めの調子で展開した今回の素顔、いかがでしたか。普段はいたって明るいメンバーも、マクロ的視野なら意外とシリアス路線でも書けるものだと、ちょっと発見であった。ちょっとカッコよすぎた感もなくなりますが、そんな雰囲気よりも普段は一所懸命の姿が本当のところであって、もう少しかわいらしいイメージなのです。

そんな私達KFABも、昨今は仕事や家庭の都合やら、他団体とのスケジュール調整やら、なかなか前途多難な状況も見え隠れするようになってきた。いまだに創立時のスピリッツは変わるところを知らない私達であるが、時代の移り変わりや周りの状況変化に対応が必要になってきたことも事実である。世界のブラスアンサンブル界においても、一昨年にはあのフィリップ・ジョーンズ先生が他界され、カナディアンブラスの重鎮もメンバー交代となり、世代交代を象徴する出来事が続いている。この10回はKFAB文化の構築そのものであったと総括するならば、次なる10回は良い意味でその発展に加えイノベーションの色合いを添えていきたいと思う。皆さん、今後ともよろしくご指導ご鞭撻のほどよろしく申し上げます。

一期一会 —— 元々は茶道において、この出会いの場は一生にたった一度この時限りであると考えて、常に全身全霊をかけて客人をもてなすことを言う。

音楽と人との出会いには様々なかたちがある。
意識的にその場に歩いて行くこともあれば、偶然そこの前に立ち止まったことから運命の扉が開くことだってある。

演奏家と作曲家も常に一期一会であると思う。
この素晴らしい偶然があるからこそ、音楽は生きて流れ出す。

今日も私たちはこの空間で沢山の音楽を演奏します。
演奏したいと思い立ったあの瞬間から数え切れないほどの出会いを重ねて歩いて来て、やはり今同じ想いが心に溢れています。

一期一会。
これが私たちの音楽であり、これからもずっと変わることはないと思う。

団員名簿

Trumpet

浅野 弥生
伊豆田 和也
伊豆田 恭子
貝發 達也
加悦 愛子
北村 雅紀
北村 美繁
鶴田 美綱
能勢 秀之

Horn

井田 右子
北脇 知己
來島 由明
野々口 義典
古市 道和

Percussion

若松 愛彦
清水 美紀(賛助)
中路 友恵(賛助)

Trombone

小野 道生
金光 泰典
坂根 通寿
田中 寿嘉
藤岡 信雅
藤本 昌巳
南 信明

Tuba

竹内 信也
峯松 也勲

演奏者

R. シュトラウス：ウィーン市の祝典音楽からのファンファーレ

Tp1貝發 Tp2鶴田 Tp3北村(雅) Tp4伊豆田(和) Tp5浅野 Tp6能勢 Tp7加悦
Hr1古市 Hr2來島 Tb1田中 Tb2金光 Tb3坂根 4Tb南 BTb小野 Tu竹内 Per若松

E. グリーグ：作品集

Tp1伊豆田(恭) Tp2能勢 Hr古市 Tb金光 Tu峯松

C. ドビュッシー：シャルル・ドルレアンの3つの歌

Tb1藤岡 Tb2金光 Tb3南 Tb4小野

B. ピーチ：金管5重奏のための音楽

Tp1北村(雅) Tp2伊豆田(和) Hr來島 Tb田中 Tu竹内

B. オール：金管10重奏のためのトーナメント

Group1: Tp1貝發 Tp2北村(美) Tb1田中 Tb2金光
Group2: Tp1鶴田 Tp2浅野 Tb1藤岡 Tb2南
Hr古市 Tu峯松

伝承曲：ジェリコの戦い

Tp1能勢 Tp2伊豆田(和) Tp3北村(美) Tp4北村(雅) Hr來島
Tb1田中 Tb2藤岡 Tb3坂根 BTb小野 Tu竹内 Per若松

J. クツィール：金管4重奏のための小組曲

Tp1貝發 Tp2浅野 Hr古市 Tb南

J. ブラムス：ハンガリー舞曲第5番

Tp1北村(美) Tp2鶴田 Hr來島 Tb藤岡 Tu峯松 Per若松

A. ドヴォルジャーク：スラヴ舞曲集 作品46より第8曲

Tp1貝發 Tp2浅野 Tp3北村(美) Tp4伊豆田(恭) Hr古市
Tb1金光 Tb2南 Tb3藤岡 BTb小野 Tu峯松 Per若松・清水・中路

G. ビゼー：カルメン

Tp1能勢 Tp2北村(雅) Tp3伊豆田(和) Tp4伊豆田(恭) Hr來島
Tb1田中 Tb2坂根 Tb3南 Btb小野 Tu竹内 Per若松・清水

京都ファインアーツ・プラス 第10回演奏会

主催:京都ファインアーツ・プラス 後援: -STATION FM KYOTO

印刷:(株)コムラ

